
 私がなぜ現在の科目を選んだか

「消化器内科」

信州大学医学部内科学第二教室

倉石 康 弘

学生時代の頃は消化器内科に実習で回る機会がなく、自分が消化器内科医になるとは思っていませんでしたが、初期研修で消化器内科にローテートし内視鏡を握らせてもらってから気持ちが一変しました。はじめは全然思うようにいかず四苦八苦しなからスコープを動かしていましたが、徐々に回数を重ねていくうちに上達を実感することができ、純粋に「内視鏡が楽しい」と思い、消化器内科への興味をもつようになりました。研修病院の消化器内科は朝から晩まで内視鏡を行うような非常に忙しい環境でしたが、そんな多忙の中でも指導医の先生方は患者の臨床判断や内視鏡などに関して熱心に指導をして下さり、このような先生たちと一緒に仕事がしたいと思い消化器内科医になることを決めました。

医師3年目からは第二内科に入局しましたが、当時は消化器内科、腎臓内科、血液内科合同の教室で、各

 私がなぜ現在の科目を選んだか

「呼吸器外科」

信州大学医学部外科学教室

呼吸器外科学分野

原 大 輔

実習などにおいて学生から「先生は、どうして呼吸器外科を選んだのですか？」と聞かれることは少なくない。そんな時、カッコいい理由を堂々と述べられる医師でありたいものだ。この機会に、思考してみたい。

まず医学生諸君に伝えたいのが、そもそも医師を志した理由は人それぞれであり、その理由が目的を形成し、その目的を達成しやすい診療科を選択するのだから、診療科選択の正解は「個人の内にしか存在しない」ということだ。命を救いたい、お金を稼ぎたい、手術がしたい、実家の医院を継ぎたい、癌と戦いたい、研究成果で医療を変えたい、…色々な動機によって魅力的な診療科は異なるのであり、他人の選択にとやかく言うべきではない。

では私はというと、やはり生命維持と関連度の高い臓器で勝負したい気持ちがあったため、脳や心臓や肺といった臓器を専門とする診療科に惹かれた。学生実習を通して、手術を執刀する諸先生方の職人然としたカッコよさに憧れて外科領域を志すようになり、いつ

科にローテートしながら幅広い疾患の患者を診ました。「消化器内科である前に内科医であること」とよく指導をうけ、どの科にも該当しないような診断の難解な患者をよく入院でみていた記憶が残っています。全く異なる3科があわさった第二内科だからこその考え方と思いますが、その指導もあって患者を診る際には「これはうちの科じゃない」と診療を断るのではなく、まずは内科医としてできるだけ診ようという気持ちをもって診療を行っています。

消化器内科は対象となる疾患が非常に多岐に渡り、専門領域として肝臓、消化管、胆膵と分かれています。私は「内視鏡がしたい」というのが消化器内科志望の原点でしたので、胆膵領域を専門として選択しました。胆膵領域の疾患は胆管炎や膵炎などの緊急疾患に関しても、膵・胆道癌などの悪性疾患に関してもスピード感と確実な診断・治療が必要であり、自分の判断が患者の予後を左右する難しい領域です。また、日々内視鏡の治療や診断技術が進歩しており、常に勉強し新しい知識を身につけていく必要があります。大変な仕事ではありますが、その分やりがいや充実感を感じながら日々仕事を行っており、消化器内科を選択しよかったなと感じています。 (信大平23年卒)

しか癌と戦うことを自分の将来の姿として意識するようになっていた。これが「命に関わる臓器と、手術を通じて、癌と戦う」ことができるという strong point を有する呼吸器外科を選んだ理由なのだろう。もしも脳癌、心臓癌があれば、自分はどうしていただろうかと、ふと思うこともある。

選んだ理由は目的によって定まるが、今も続けている理由はやりがいによって支えられる。なんといっても無事に手術が終わり、元気に退院する患者さんから「ありがとうございました」の御言葉を頂戴する時は、得も言われぬ充足感に包まれる。外科医冥利の瞬間であり、自分の手で癌を取り除くという達成感とは味わうことができない特権のように思う。これが呼吸器外科医の最大のやりがいであることに議論の余地はない。

ところで私はカッコいい医師でありたい以上に、長々と自分語りをする大人でありたくない。ゆえに学生から前述の質問をされた場合、こんな長話はせず「俺は麻雀が好きだから、呼吸器外科医として昼も夜もハイを切って生きていこうと思ったのよ」とでも答えておくれ、当時の私のような麻雀好きの学生が呼吸器外科に興味を持つきっかけになる方がよほど嬉しいし、ついでに面子も揃えやすくなるかもしれないとくれば、なおよろしいではないか。 (信大平22年卒)